

わが恵み、汝に足れり

奨励	上林 順一郎〔かんばやし・じゅんいちろう〕
奨励者紹介	日本キリスト教団松山教会牧師

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

（コリントの信徒への手紙二 12章9—10節）

わたくしごとになります。私の父親は若い頃勤めていた小さな町工場で、誤って機械に左手を挟み人指し指と中指の半分を失ってしまいました。私が自分の父親の左手の指が2本欠けていることを知ったのは小学校3年生ぐらいでした。うかつな話ですが、それまでは全く気がつかなかったのです。

それというのも、父親は人前ではほとんど手を開くことをしなかったのです。それにいつも左手を軽く握っていました。拳を握ると人指し指と中指の先の部分は親指でほとんど隠れます。よほど気をつけないと分からないのです。さらに、右手を左手の上に重ねるようにしていました。ですから、よほど気をつけないと、左手の指先がないことに気がつかないのです。おそらく、自分の過失とは言え2本の指先が欠けているのが恥ずかしく、他人の目に触れないように隠しながら生きてきたのでしょう。

私たちは人生を生きていく中でたくさんものを受け取り、たくさんものを増し加えながら生きています。それが人生だと考えています。そのとおりだと思います。増し加える人生と言えば、たとえば1年ごとに年齢が増しますし、体も大きくなります。勉強すればするほど知識や教養も増します。一生懸命働けばお金も増えるし、結婚すれば子どもがでる家族も増えます。友人や仲間も増えていきます。社会的な地位や名誉も増していくことにもなります。

このように、私たちの人生ではいろいろなものが増し加えられていく。それが人生であり、生きている意味であり、証であると考えています。人生とは「足し算」であり、プラスしていくものだと思っています。しかし、果たしてそうでしょうか。私は必ずしもそうではないと考えるのです。

というのは、人生には思いがけず失っていくことがあるのです。予想もしないのに無くしてしまうことがあります。たとえば、突然の病気で健康を失ってしまうことがあります。家族や愛する人を亡くしてしまうことも経験します。仕事に失敗し、生活の基盤を無くしてしまうこともあるでしょう。地位や名誉なども一瞬のうちに失ってしまう場合もあります。失うことはとても辛いことです。悲しいことです。そしてとても苦しいこともあります。でも失うことは辛く、悲しく、そして苦しいマイナスの出来事なのでしょうか。私の父親のように指先が2本欠けていることは、それだけで人生はマイナスになってしまうのでしょうか。

足らないものが、あるからこそ

今から皆さんに「算数の問題」を一つ出しますので考えてみてください。「ここにリンゴが10個あります。3人の子どもがリンゴを食べました。リンゴはいくつ残ったでしょうか」。これは数学ではありません。算数の問題です。大阪のある小学校の教室で実際に出された問題です。黒板に先生がこの問題を書いた途端、教室中がパニック状態になったそうです。子どもたちはこの問題を見て騒ぎ出したのです。何人かの子どもが「先生、そんな問題、答えなんか出るわけない」「そうや、答えなんか出えへん」と、口々に騒ぎ出しました。

皆さんはどう思いますか。これは割り算の余りを出す問題ですが、本当に答えは出ないのでしょうか。クラス中の生徒がワイワイと騒ぐ中で、一番後ろの席に座っていた男の子がパッと手を挙げて言いました。「先生、問題が間違っています!」。クラスで一番成績の良い子どもだったそうですが、「問題が間違っている」と、指摘したのです。皆さんはどうですか。「答えは出ない」と思いますが、それとも「問題が間違っている」と考えますか。どうでしょうか。

ある女子大学でこの問題を出したら、最初に手を挙げた学生が「リンゴは1つも残りません。全部食べてしまったから」と答えました。トンチの問題と思ったのかもかもしれません。皆さんはどうでしょうか。実は「答えが出ない」わけでも、「問題が間違っている」わけでもないのです。この問題には実は一つ欠けたところがあるのです。通常の問題だと「リンゴが10個あります。3人の子どもが2つずつ食べました。残りはいくつでしょうか」となります。割り算の余りの問題ですが、答えは「残りのリンゴは4個」となります。「2つずつ食べました」という部分がないのです。これでは割り算にはならないのです。ですから、子どもたちが「答えは出ない」と言ったのは当然ですし、「問題が間違っている」という指摘も正しいのです。

でも、答えは本当に出ないのでしょうか。あるいは問題が間違っているのでしょうか。そうではありません。実は答えはいくらでもあるのです。たとえば、「3人の子が1つずつ食べた」と考えればリンゴは7個残ります。「3人のなかでAくんはリンゴが好きで5つ食べました。Bくんは2つ食べました。Cくんはリンゴが嫌いで食べませんでした」とすれば、答えは3個です。「3人ともお腹がいっぱいだったので誰もリンゴを食べませんでした」、そうするとリンゴは10個全部残ります。そうです、答えはいくつでもあるのです。あの女子学生の答えも正解ということになります。通常の算数の問題の正解は一つです。でも問題に欠けがあると、答えはいくらでもあるということです。足らないものがあると、それはマイナスとなるのではなく、プラスになることが起こるのです。

失って、見つかるものがある

今日は皆さんに一人の女性のことについてお話をします。名前を田原米子さんと言いますが、彼女は17歳の時、東京・新宿の小田急線のホームに入ってくる電車に飛び込んで自殺をはかりました。線路の上に身を投げたその体の上を鉄の車輪が通り過ぎていきました。彼女が気がついたのは近くの大病院のベッドの上でした。「死ななかったのだ」と一瞬思ったのですが、意識が戻るにつれて彼女は自分の体に異変が起きているのを知ります。彼女の左の足は膝から下の部分が車輪に轢かれてありませんでした。右足はくるぶしから先がなくなっていました。それだけではなく、左腕も肩から10センチほどを残してその先はなくなっていました。命は助かった、しかし、あまりにも多くのものを失ってしまったことを知った彼女は、医者にこう叫んだそうです。「先生、このまま死なせてください」。17歳の少女が「死にたい」と思って電車に飛び込んだが、死ねなかった。命が助かった。しかし同時にあまりにもたくさんものを失った。それでなお、生きていきたいという思いになるのでしょうか。皆さんだったらどうですか。それでもなお生きていこうという気持ちにはおそくならないでしょうか。彼女は「このまま死なせてください」と言いましたが、でも医者も看護師も懸命に治療しました。

しかし、彼女は「こんな姿で生きたくない」と思い続け、再び自殺しようと企めます。眠れない彼女のために毎日睡眠薬が出されます。彼女はそれをひそかに枕の下に隠し、致死量に達した時に一気に飲んで死のうと思ったのですが、看護師に見つかって取り上げられてしまいました。病院の屋上に上って飛び下りれば必ず死ねると思いましたが、屋上まで登って行く足が彼女にはありませんでした。

そんな時、一人の見知らぬ外国人が彼女の病室を訪ねて来ました。そしてベッドの傍で聖書を読み、お祈りをして帰っていきました。見知らぬ外国人にお祈りされても、彼女の気が晴れるわけでもありません。生きようという気持ちになるわけでもありませんでした。しばらくして一人の青年が毎日のように訪ねて来て枕元で聖書を読み、お祈りをするようになりました。その男性が後に結婚する相手になるのですが、それでも彼女は「死にたい、死にたい」と思い続ける日々でした。

そんな日が続く中で、次第に一つの聖書の言葉が心の中に残り始めました。その言葉とは「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られたものである。古いものは過ぎ去った、見よ、すべては新しくなったのである」（コリント人への第二の手紙5章17節日本聖書協会『口語訳 聖書』）というパウロの言葉でした。「私も新しく造られる?新しく生きることができる?こんな私でも!」

たくさんものを失ってしまったのに新しく生きることができる、という言葉が心に刻みながら、彼女は病床で洗礼を受けるまでになります。治療が進み、いよいよ退院する時期を迎えました。そんな朝、看護師が彼女のところに来て「退院が近いから包帯をとりましょう」と言いました。右手にはまだ包帯が巻かれていました。看護師が右手に巻かれていた包帯をとり始めました。右手はありました。手首まで包帯が解かれました。手首もありました。掌に巻かれていた包帯が最後にとられました。その時彼女はこう叫んだのです。「私の右手の指、3本もある」。彼女の右の手の薬指と小指も列車に轢かれてなくなっていたのですが、彼女はその時「私の右手の指、3本しかない」ではなく「3本もある」と言ったのです。もし私たちなら、そんな言葉が出てくるでしょうか。

いよいよ退院することになり、実家に帰るにあたって、お父さんが彼女に言ったそうです。「家に帰って来ても恥ずかしいから一歩も外に出ないように」。お父さんにとってはそういう気持ちだったのでしょう。自殺をしそこなって、その上障がい者となって家に帰って来る。そんな娘の姿を近所の人に見られるのは恥ずかしい。「家からは一歩も出るな」。

その話を聞いた、かの宣教師が「それではあなたは新しく生きることにならない。アメリカへ行って病院でリハビリをして自分の足で歩けるようになりなさい」とすすめ、彼女はアメリカにたった一人で渡ります。義足をつけてリハビリをする。それはとても辛いリハビリだったそうです。切断された両足の骨がそのまま義足に当たって痛む、その足で歩かなければならぬ。自分がアメリカでリハビリを続けるために多くの人が献金をし、お祈りをしてくれている。そのためにも頑張らなければと、何度言い聞かせても辛くて苦しい日々が続きます。あまりの辛さと孤独な生活に疲れ果てて、ついに彼女は帰国を決心します。「もうこれ以上は無理だ。日本へ帰ろう。二度と家から外に出れなくてもいい。明日は日本へ帰る」。そう決心して医者に帰国の決意を告げるため病院に行きます。そして待合室のベンチに座っていた時です。トントンと後ろから背中を叩く人がある。誰も知らないこのアメリカで誰が私の背中を叩いているのか。振り返ると一人のアメリカ人の女性が、「あなたはとっても哀しそうね。このコーヒーを飲んで元氣を出しなさいよ」と紙コップを差し出したのです。彼女はそれを受け取ろうと右手を出して愕然とします。紙コップを差し出した女性の右手は義手だったのです。「片手を失った見も知らないアメリカ人が、私を励ますために飲み物を差し出してくれている。私にはまだ3本も指がある」。彼女は決意を新たにしていリハビリを継続し、両足に義足をつけて日本に帰って来ました。そしてキリスト教の伝道者になりました。

ないから、できる!

彼女はとっても闊達でユーモアのある人です。あるところで話を聞いたことがあります。その時、彼女は「私は何でもできますよ。両足がなくて、片腕もありますが、何でもできます。やってみましょうか」。彼女はリンゴを手にして、「このリンゴを剥きましょう」と言いました。右手だけで果物ナイフでどうやってリンゴを剥くのだろうかと見ていました。この女性は大した人だから、もしかしたらリンゴを上には放り上げて、落ちてくるところをナイフでぱっと皮を剥いて、と一瞬思ったのですが、そんなことはできるわけはありません。

彼女は「リンゴを剥きますよ」と言いながらテーブルの上にリンゴを置いて、ナイフで半分に切りました。そして半分になったリンゴをテーブルの上に置いて、上の部分からナイフで皮を剥き始めたのです。リンゴの皮は簡単に剥かれました。「両手を自由に使える人は片手でリンゴの皮を剥くことは考えないでしょう。リンゴを片手で剥くことができるのは片手がないからです。私には皆さんとは違ってたくさんものがありません。手も片手しかありません。だから片手でできるのです。ないからできるのです。いや、私のないところにキリストがおられるからです。この見えない腕に、失った両足のところにキリストがいてくださると、私は信じることができるようになったのです。私はたくさんものを失ったけれども、しかし、最も大切なキリストを得たのです」。

ここにいる皆さん方も、これまでの人生の中で失ったたくさんものがあったかもしれません。その時には悲しんだり、苦しんだり、涙したことでしょう。これからの人生においても大切なものを失うことがきっとあると思います。その時には、私たちが失ったところにキリストがおられるということを知ってほしいと思います。

ないからこそ、できることがある。もしそのように受け入れることができるならば、その時から私たちの人生はきっと変わるだろうと思います。そしてどんな困難に出会っても、愛と希望をもって生きていけると信じています。

最後に、「おぞねとしこさん」という方の詩を紹介して終わります。

おぞねとしこさんは幼い時にかかった病気で全身が麻痺し、寝たきりの不自由な状態で詩を書き続けた詩人です。

人を愛する資格はね

人を愛する資格はね

はやく走れることじゃない

じょうずに話せることじゃない

人を愛する資格はね

心でものを聞けること

心でものが見えること

愛を伝える資格はね

人を信じる資格はね

お金を持つてることじゃない

名前が売れてることじゃない

いつか別れがやって来て

さよならをしたそのあとも

生きて いけると誓うこと

なみだ流したそのあとで

生きて いけると誓うこと

(高文研編集部編『中・高校生と読みたい若い日の詩』高文研 2003)

2015年11月3日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録